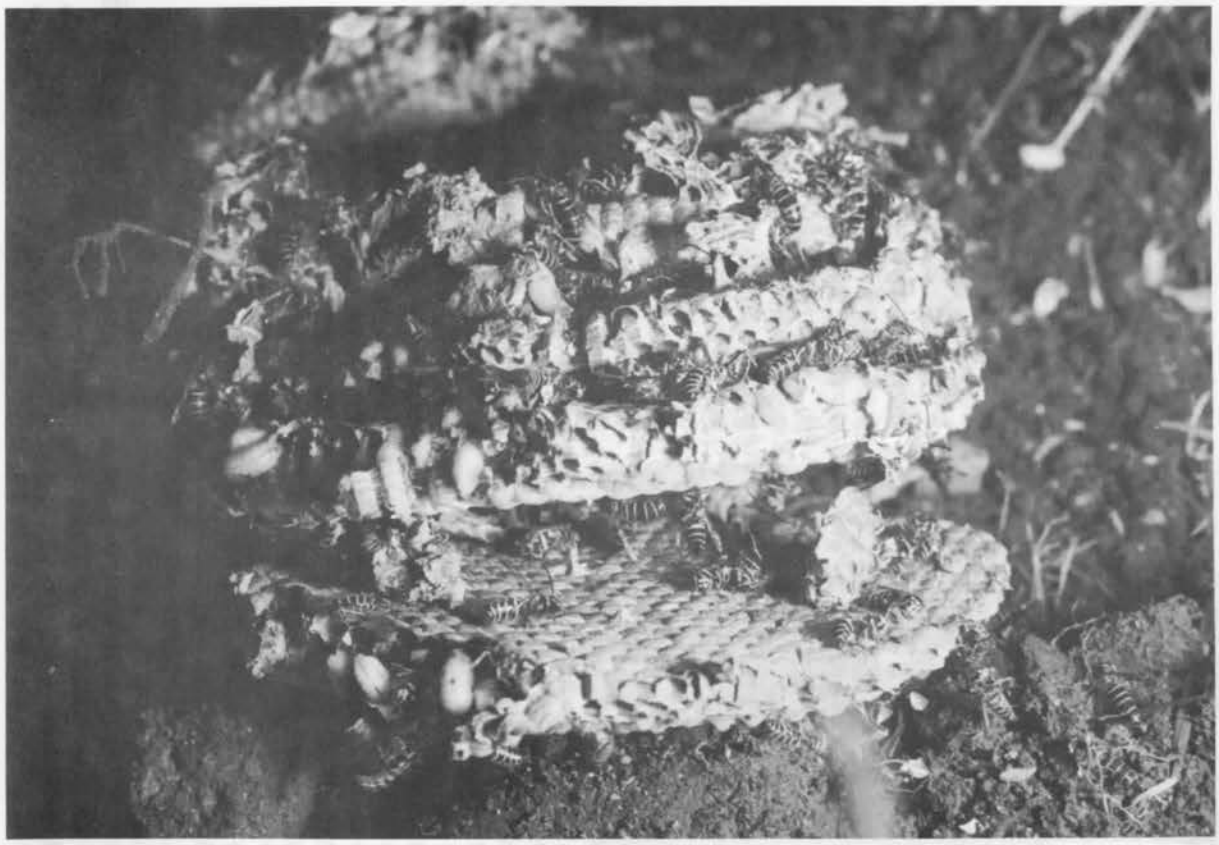
山と博物館

第26巻 第9号　1981年 9月25日　大町山岳博物館



採取したジバチ（クロスズメバチ）の巣　撮影　飯島八郎

スガレ追い

スガレ、ヂスガレと呼ばれるクロスズメバチは日本全国に分布しているといわれているが、その巣をとって中の「蜂の子」を食べる習慣は長野県、岐阜県地方では広く行なわれている様子である。これも外海に遠い山国の生活の智恵であろう。

スガレの巣を探すのには、エサをとりにくる働蜂を見つけトンボやカエルを串ざしにしたものをそっと蜂の前に差し出し、これにとりつかせる。この肉を一回とらせてやると蜂は数分で再び戻ってくる。この蜂に今度は真綿をつけたエサを与える。蜂は肉を口にしっかりくわえると胸の下にかかえこみ、後足を数回よりあわせると飛び立つ。その後を追って巣を見つけるのだが、立木や雑草にさえぎられて一回や二回で巣を見つけることは難しい。そんな昔の子供の頃の事がきのうの事のように思い出される。

最近は真綿をつけて追うような事はほとんどやらない。蜂が巣を作る地形や、周辺のカラマツの木に蜂が集まっているかどうかを見る。蜂がいれば周辺の田畑や草原に蜂が飛んでいるはずだから、その状態を観察して巣のある方向へ近づき巣を見つける。

スガレは九月中旬になると女王段ができる。この頃になると蜂の数も多くなり、巣門を出る時に土をくわえて高く飛び立つ。そのために巣も見つけやすくなり、巣も大きく六～七段はある。

そのスガレも最近は少なくなったように思う。とりかたが激しいためなのか、あるいはホタルやイナゴが減った農薬の関係もあるのかも知れない。

私の仲間は七～八月の畦の草刈りなどで見つけたスガレをとってきて木箱に入れて飼巣にして、巣から出入りする蜂を朝晩眺めて巣の大きくなるのを楽しみにしている。そして来る年も近くにたくさんの巣を作ってくれるよう十一月に女王蜂を飛び立たせてやる。私はこれが「スガレ追い」の心だと思う。

（大町市商工観光課係長　前多千里）

長野県大町市の珍しい古墳

―方墳と双円墳に見る古代の環境―

原田　昿

西方より見たクボ山古墳（矢印）

はじめに

長野県大町市では、現在市史編纂の事業が進められていて、各分野の資料が収集されつつある。こうした中で私は、市の北部地域に分布する古墳調査を今年の四月から行ったのであるが、その結果は長野県内では珍しい方墳と双円墳を確認することが出来たので、ここに中間的な意味で述べて見たいと思う。

一、古墳とは

全国に一五萬基は存在するといわれている古墳は、およそ四世紀から七世紀にかけて築かれた墳墓のことを指していて、他の記念物的なものとは異なる。その形状は時代の推移によって種々の変化が見られ、構築の主体部分も土が大部分を占めるもの、石で全体を形造るもの、土石を混じたものなど多様である。

ここで特に取上げることとなった方墳と双円墳について、その形はどのようなものかといえば、古墳の形を上から見て、四角形のものを方墳、円形墳が二基接しているものを双円墳と呼んで区別しているわけで、大町市にはこの他に円墳といわれるものが相当存在しているが、全国的に見てもこの円墳が全体の大部分を占めており、更に古く各地方に勢力を持った豪族は、前方後方墳とか前方後円墳などの巨大な古墳を築いていたが、途中で円墳に変るなどしているのを見ると、先づ円墳を築いた人達は地方にあっては有力な氏の長であっても、身分は地方の一般的な人達であったものと思われるのである。

古代の身分制度はその時代毎に種々変りつつあったのが実状であるが、中央における有力な豪族と、地方の豪族とはやはり一線を引かれるのが常であったらしく、古墳の形にもそれが規制されて現れたようである。

二、柏崩北古墳群

大町市の北端に仁科三湖と呼ばれる三箇所の湖がある。この南端の木崎湖から流れ出る農具川は、南流しながら両岸に沿う水田を潤して、大町地方としては重要な水系の一つとして数えられている。私の調査はこの農具川による古いと見られる水田地帯を対象として、どの程度の古墳があるのかという一般的な分布調査であり、発掘などについては考慮されない計画であった。古墳は木崎湖周辺と農具川の左岸に近い中山地の外縁部分に多く、そのほとんどが円墳であるが、小型のものが多く、特別巨大な古墳は見当らなかった。

従来この地方を訪れた学者と研究者は、大町地方には古い古墳はないのではないかとの説があることについて、これを取上げるということはなく、研究の対象とするだけのものはどうもないという位に考えられて来た感があったのである。今回そうした中で、大町市大町三日町柏崩という所で、三基の方墳を確認することが出来て、この地方においての古代史が更に重要性を増して来たことである。

この三基は何れも土墳であり、山頂の一号墳から山麓の三号墳まで、順次下へ築かれて来たことがたどれるもので、恐らく家系を同じくする人達の三代にわたる墳墓と見てよいのではないかと考えられる。

そこで重要なのは方墳という形についてであって、この方墳は長野県内では非常に少ないということに注意したいと思う。

方墳を全国的に見ると、九州と四国に少なく、古代の出雲である島根県地方に古くから多いといわれ、続いて京都や大阪の地域に相当見られ、奈良県においては桜井市附近と西北の平群谷や飛鳥地方に相当な数の方墳が確認されているといわれる。又、関東地方にもこの墳形が採用されて相当大型の方墳が各地に見られるとのことであるが、関東の諸豪族は大和朝廷から重視されていたことが考えられるのではないだろうか。

古墳は一つの墳墓であるから、この古墳は誰々某のものと特定出来ればよいのであるが、ほとんどの古墳はそれが出来ない実状である。従って周辺の環境やそれぞれの古墳にまつわる伝承と、考古学的な調査から見て、古墳の主を推定する以外にないのである。例えば、奈良県桜井市の阿部山古墳群は、近くの豪族阿部氏の築いたものと考えられ、この中に方墳の谷首古墳と艸墓古墳があり、同県の平群谷には西宮古墳なる方墳があり平群（へぐり）氏のものとされている。更に飛鳥地方には、都塚古墳、石舞台古墳、越岩屋古墳、平田岩屋古墳などの方墳があって、この中で石舞台古墳は蘇我馬子の墓であり、越岩屋古墳は斉明陵であるという説がそれぞれ有力である。一方大阪府の南河内郡太子町磯長谷には、「記」「紀」などに記される所によると、天皇・皇族の陵墓が集まるとされ、この磯長谷古墳群の中では用明陵から天智陵までが方墳であった

大町市の古墳

との説があり、重要な参考事項として考えられるものである。以上の奈良県を中心とした地方や関東地方の方墳は、古墳としては後期の年代のものが大部分を占めるとされているが、その実年代は六世紀から七世紀にかけてと見られており、内部構造も横穴式石室を設けているものがほとんどであるという。

そこで長野県の方墳であるが、方形で石を積み上げての積石塚といわれるものが、松本市から東筑摩郡北部地域に見られ、かねてからこれらの古墳について論じられて来たいきさつがある。これらは古い記録などから推察して、古代の朝鮮半島北部地方にあった高句麗の国からの渡来人によって築かれたのではないかといわれ、この説が有力であるが、それらが全部そうであるかどうかは断定出来ない現状である。

そこで大町市で発見されたような土盛りの方墳は、南信地方には不明であり、松本市附近にも見当らないようで、長野市と上高井郡小布施町でそれぞれ一基又は二基が発見されているといわれる所である。この両地域はそれらの方墳の近くに大きな古墳群が形造られており、そうした古墳との関係が充分考えられる所である。それは長野市の場合は市内松代町の大室地籍であって、約五〇〇基に及ぶ円墳を主体とした古墳群であるといわれ、積石塚が多いと注目されている。この積石塚は小布施町でも大町市においても確認されており、数の上では相当の差があるものの、何等かの連絡と広い意味での政治的文化的な同一圏内でおきた現象と見られるのではないだろうか。

ここで大町市の場合について見ると、柏崩古墳のある西方一帯は、古来より借馬田圃といわれ、市内でも有数のまとまった水田地帯を形造り、前述の農具川による温水で多収することの出来る所である。ここは先年から圃場整備事業の対象となり、それの事前調査で五世紀末以降の竪穴式住居址が六〇戸以上と堀立柱のみの建物址三〇棟や、多くの土器（土師器・須恵器・黒色土器）類と鉄製品他が検出されており、それも調査はごく限定された所で以上の出土を見るという所である。こうした古い村落を見下す位置に三基が次々と築かれた状況は、当時の政治的な面を表現しているものと見てよく、他の古墳が円墳で集団をなして約六〇〇㍍南に存在するのを見ても、特別な権威を持った家系の人達がこれらの方墳を築き、この肥沃な水田地帯を治めていたことが考えられる。柏崩北一号墳はこの中でも古い形を持つものと思うが、それは二段築成で墳頂と墳丘斜面に葺石が一面に見られることである。葺石は古い古墳には全面に施されるのが普通であるとされており、長野県でも松本市の弘法山古墳（四世紀末）や、更埴市の森将軍塚などが葺石のあることで知られている。柏崩北一号墳が六世紀も相当早い頃のものと考えられる点において、この時代に大町地方は大和朝廷との関係が生じ、それは国造（くにのみやっこ）という信濃の土豪とはある程度身分的に異なり直接に連絡のとれる立場の人がこの地方を治めたのではないかと考えるのである。これらについてはこれ以上の究明は出来ないが、何れ古墳の細部的な調査を通じて相当な面を明らかにすることが出来ると思う。

借馬遺跡の発掘風景　後方左端が柏崩山　55年4月

三、クボ山古墳

続いて県内では未発見の双円墳のクボ山古墳について述べて見たいと思う。

この古墳は、木崎湖東方のクボ山山頂にあり、円墳二基を重ね合せて築いた珍しい形の古墳である。

全国でもこうした形の古墳は七基を数えるに止まり貴重である。

私がこのクボ山古墳を重要視するのは、形もさることながら、全国に散在する双円墳が古代交通の重要地点と見られる所にあることで、これらは何らかの目的があってほぼ同時代にそれぞれの地に築かれたものと解されるもので、その意とする所は何であったかということである。

クボ山古墳はやはり土盛りで築かれ、平面上は二基の円墳が連接しているかのように見える。しかしよく見ると、クボ山の頂上がくの字形に曲るのに対して、古墳の長軸を南北にとり、西方を正面として二基が並らぶ形となり、その南端は峰よりも相当に出ているのである。つまり南北どちらも大きさを同じくした円墳を、中央へ重ねた形としたのである。

この古墳は全長三二・五㍍、東西はどちらも二〇㍍、高さは二・六㍍を測るもので、大町地方の古墳としては最大ではないかと見られる。

そこでクボ山古墳のある大町市平の木崎は、北アルプスの一支脈である仁科山脈の南端と、東に広がる新しい地層の中山山地が両側から迫って、そこに地殻変動で生れた木崎湖を控え、自然の障壁を眼前にした地域である。こうした地帯は、現在では埋め立てなどによって地形も変り、道路や鉄道などによって交通の便がよくなって忘れられているが、古代にあっては交通上の難所として、舟などによる渡しがあったことも考えられ、現在そうした伝承が木崎湖南岸にのこっている。

これらから見て、或はクボ山古墳の主も、木崎湖の舟運と、この地域一帯の交通軍事の両面で特別な任務についていた責任者であったことも考えられるものである。

前に述べた柏崩北古墳群の主達が、三代の間に培った勢力と統合力によって、更に発展して北方に移り、より広い意味での在地の支配を高めようとした結果が木崎湖附近の開発であったかも知れない。そうしてクボ山古墳の築造という形に現れた可能性もあり、これらは同一家系であったのではないかと考えられるものである。

（大町市史編纂調査委員）

全国双円墳表

	所在地	名称	規模	埋葬施設	副葬品	備考
1	山口県柳井市伊保庄	八幡山古墳		横穴式2		瀬戸内航路
2	高槻市塚原町	塚原古墳群		横穴式		山陰への通路
3	大阪府南河内郡河南町	金山古墳	長78m	横穴式内家形石棺2	須恵器	大和への通路
4	大阪府南河内郡太子町山田	二子塚古墳				同上
5	京都府福知山市牧町	牧古墳群		横穴式	刀　刀子　鉄鏃　杏葉と雲珠	山陰道
6	滋賀県大津市石山国分町	国分大塚	長30m	横穴式		北陸東山両道
7	三重県鈴鹿市北一色町	保子里一号　車塚	長50m	横穴式内組合式石館	鏡　垂飾付耳飾　玉類　環頭大刀	東海道

珍しいキノコ

牛越和人

これから秋の味覚とされている、キノコシーズンの到来であるが、県下は日本全土のうちでもキノコの種類の多いことで既に周知されている。さて、この多い種類のキノコの中で、どのキノコが食用で、どのキノコが毒性があるのかを見分けるのは困難なことである。そこで自分が知っているキノコは採るが、判明しがたいか疑わしいキノコは採らないことである。キノコとは菌類であるから秋だけでなく四季を通じ、その時期に適したキノコがでている。

春雪の消えた頃、アミガサダケ、ナラタケ、ヒメキクラゲ等、山菜等を採りに山林に入ると思わぬ副産物に出逢う、わらび採りに行きヒメキクラゲを沢山採れたときは思わず微笑がでる。このキノコは主に楢の木の枯木に群生する。遠くから見ても枯木が太った感じで見え、採集は雨上りの日が採り易い、生のまま三杯酢で食べるとおいしいキノコ。また沢山とれたときは甘辛に煮つけて加工するもよい。

七月に入ると、ヤマドリダケ、アカジコウ、アミタケ、アンズダケと種々のキノコがでているが、アンズダケは、ほのかなアンズの香りをただよわせた夏のキノコとしては、しっかりしたキノコで櫟林に多くでる。味噌汁の実にすると歯ごたえもあり、ちょっと脂肪性の感じのあるキノコである。私が「キノコ採り」(仮称)といわれ好きになったのも、このキノコが病み付となる。

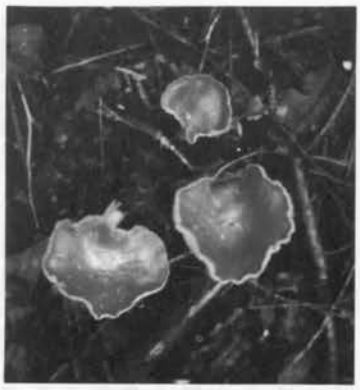
子供の頃、甲虫を採りに行きアンズダケを沢山採ったのに始まり、ハツタケ、ヌメリイグチ（林の中）、マツタケ、シメジ、コウタケ等（奥山）と三十有余年親しんでいる、キノコはその年の気候等と関連は充分あり、今迄の私の感じでは、夏に台風が通過する年は良くキノコがでている。台風が上陸する年は、温度と湿度がキノコに適し、なお温度もキノコには平均十八度～二十度位が良いとされている。そのような年は、山に入ると幾種類ものキノコが多くでて、これが全部食用であればと思う。図鑑及び諸先輩の指導助言もあって種類を覚えるようになったが、なんと云っても数多いキノコで図鑑等にはないキノコもある。ある日、マツダケもあまりとれず、山合いを下降してくると、目前にボタンが咲いているように切株の上に淡黄色のキノコがあった、ハナビラダケである。図鑑等で見てはいたが、実物は始めてであり、しばらく眺めながら手にかけた。全体で十五糎位の丸型でやや硬質の感じがあり花弁を重ね立てたようなキノコで強く掴んだ場合は崩れやすい。写真を写す段になって、シボリを見ながら写したが出来上った写真は、ピンボケだった（ピントを合すのを忘れたから）。

以後、写真を撮りたいと思っているが、今だに逢わない。図鑑等によると、針葉樹の枯木又根本となっている。私が採ったのは、栂の切株であった。

カラカサタケ（撮影　清沢由之）

食用キノコのなかには、味のあるものと淡白なものとあるが、一般には脂肪性を感じるシメジ類等がうまい。この地方では、キノコを大別して本物（マツダケ、シメジ、コウタケ（カワタケ）、クロカワ（トッコ、ロウジン、イシブテ）等）、他は雑キノコと云っているが、どのキノコも、その菌種である以上、本物に違いはない。マツダケ、シメジは昔からキノコの王様とも云われ、親しまれていて、二十本から四十本ぐらい芝又は土を持ちあげているのを発見した時は、こおどりする気持になる。シメジが筋條にぞくぞくでている所に逢うと、だれかに見られていないかと周囲を見ながら…採ることに、ややあわてるものである。そのような気持になるところから本物とか云われるところがあるのかも知れない。これからキノコは限られた人の手中にしか入らないが、野山には種々のそれぞれの味わいのあるキノコが沢山あるのである。

奥山のやや低い雑木林の中でカラカサダケを見つける。このキノコは高さ二十糎、傘の径十糎、軸は鉛筆の太さ、色は茶かっ色、傘の表面に白のまだらがあり一見して、異様なキノコである。このキノコの独特なことは、傘を強く握ると壊れることなく一掴みになる、ニギリタケと称する所以である。焼いて大根おろしで食べると實に味のあるキノコである。但し、点在で数多くはないが一秋に十本や二十本は採れる。西山地区の山の一部であるが、カラスダケのでる山がある。地表に黒褐色の団子状に見えるキノコであり、株は一つ、そこから各分岐したいわゆるキノコが乱立している状態で径は、十～十五糎ぐらい。このキノコの類以は他にないので一目でよくわかる。匂いはやや海草に似た匂いを持っていて、湯でると黒い汁がでるが味は一風変っているが、まずいキノコではない。南小谷の事務所にいたときの話しになるが、ヤマブシダケを見つける。立木に五ケ位、一ケの大きさは、二十糎ぐらい（他は五～十糎）の全体が丸型をしていて、下側に針状のふさをたらしたようなキノコで一見、しし頭を思いださせる美しいキノコで壊しがたい型に育っている。限界がくると先の方から茶褐色に変色する。食すると歯ごたえがあり普通のキノコ類と味は変らない。いうなれば見るキノコの類かも知れない。



アンズタケ（撮影　清沢由之）

さて、前述のように雑キノコと称するキノコに味があると記したが、それぞれのキノコに独特の持味があり、又料理の方法により、味が異なる。一般には焼いて食べるのが一番よいのではないかと思う。

最後に冒頭に申しあげたようにキノコを知ることが肝要である。例えば「キノコはなすと煮るとアクはアクを持って制す」との云い伝えがあるが、毒キノコはアクではない。秋味は秋味が合うという意味かと思うのでくれぐれも留意し、秋味の散策を楽しんでいただきたいものである。

（北安曇地方事務所厚生課福祉係長）

山と博物館　第26巻　第9号
一九八一年九月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）